

◆私の見た「藤田祐幸さんの豊かな人生」  
広瀬隆

◆1942年8月24日、千葉県に生まれる。外房の海で育ったというだけあって、この時代の漁業者の生活が身についていたようだ。

◆1957年 中学生で物理学者を志す。

◆1962年 東京都立大学理学部に入学、物理学を専攻。大学院に進む。

◆1972年 東京都立大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了。この時代にベトナム戦争や水俣病などの公害時代に直面して、「科学者とは何か」と、懐疑的な自問をはじめ。そして学生運動に参加した。

この時期に和風を知って熱中し、江戸時代の浮世絵や版画に対する造詣を深め、伊藤若沖と、円空仏と、土佐の絵金が大好きとなり、何でも知り尽くす文化人になる。

◆松永安左エ門賞を受賞。

◆1972年 慶応義塾大学法学部教員となり、のち物理学教室の助教授となり、日吉のキャンパスを拠点に、多くの学生に公害問題と反骨精神を指導し始める。

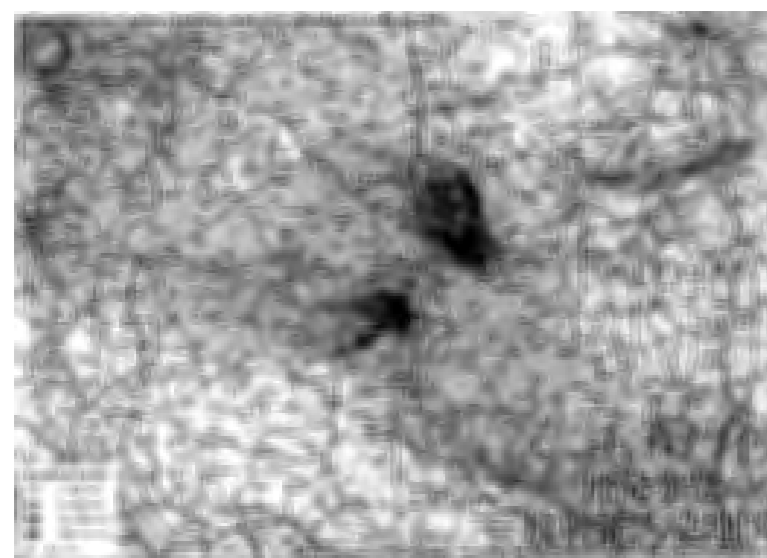
◆1973年 伊方原発1号機と東海第二原子力発電所の住民訴訟が起こされる。藤田さんものちに、この東海村の原発反対運動に参加して専門家としての学習を開始。

◆1979年3月28日 スリーマイル島原発事故が発生。この時期から積極的に反原発運動に参加して、大学では一切の研究を放棄し、生涯を反原発運動に捧げる。

◆1983年 樋田敦氏と共にエントロピー学会を設立して、新たな視点で環境問題に取り組む。

またこの年に、当時住んでいた神奈川県三浦半島の自然破壊を食い止めるため、ゴルフ場や住宅団地の建設に待ったをかけようと、宮沢賢治の童話『ポラーノの広場』に倣って「ポラーノ村を考える会」を立ち上げた。この会は、自然のなかを散策することによって一帯の魅力を学び、ポラーノ村の祭りや音楽会を織り込んだ特異な市民運動に取り組み、ついに参加した人たちが「森を守れ」と叫び出す世論を生み出して、ゴルフ場建設を阻止した。

◆1986年4月26日 ソ連でチェルノブイリ原発事故が発生し、そのあと海外から放射能汚染食品が輸入されはじめたので、放射能汚染食品測定室（たんぼぼ舎）を立ち上げ、自主的に食品の測定を開始した。国の基準の1キログラムあたり370ベクレルではなく、その10分の1の37ベクレルを基準にして、それを超えるものを公表して、汚染食品の輸入に待ったをかけた。この測定室が、のちに不幸にして起こった2011年の福島原発事故のあと、多くの人にとって貴重な食品や土壌の分析をしてくれるようになった。翌1987年に『ポスト・チェルノブイリを生きるために——暮らしと原発』（御茶ノ水書房）を発売した。



◆1990年 チェルノブイリ原発事故の汚染地の調査のためソ連訪問。以後1992年6月までの3年半に合計5回、チェルノブイリ原発事故現地の調査をおこない、その現状を報告するだけでなく、精密なソ連の汚染MAPを持ち帰って公表し、全国の人がそれを利用できるようにした。

◆1991年10月20日 中部電力の浜岡原発で8年8ヶ月にわたって、原子炉圧力容器の底から炉内に挿入されている中性子計測装置の保

守・点検・整備に従事し、被曝した嶋橋伸之さんが、29歳の若さで慢性骨髄性白血病で

亡くなった。翌1992年7月、お母さんの嶋橋美智子さんが藤田祐幸さんの市民セミナーを訪問して息子の死の経過を伝えた。以来、藤田さんは海渡雄一弁護士たちと共に嶋橋伸之さんの被曝経過を追跡し、嶋橋美智子さんのために献身的な調査をおこなって、1996年にその経過を、『知られざる原発被曝労働—ある青年の死を追って』（岩波ブックレット）にその事情をくわしく記述した。またこの原発労働者の被曝問題に取り組みはじめたことから、横浜の寿町などの寄せ場に行き、聞き取り調査をはじめ、ホームレスの人たちのために冬の焚き出しなどに参加した。

◆この頃、石川県の珠洲《すず》原発計画や、宮崎県の串間《くしま》原発計画を阻止す



るため、藤田さんが現地をたびたび訪れて住民運動をリードし、建設を阻止することに成功した。【写真は珠洲鉢ヶ崎のキャンプ場にて】

◆1995年1月17日 阪神大震災（兵庫県南部地震）が発生し、東京のたんぼぼ舎に地震問題研究会が発足して藤田さんも参加。地質学者・生越忠先生の指導のもとに、全国の原子力発電所の耐震性の調査・解析に取り組んだ。地震研究会では、みなで全力をあげて、原子力安全委員会らの嘘を徹底的に

追及した。藤田さんは、この兵庫県南部地震では、「水平動に対する上下動の比率が、断層に近いほど高く、原発が大地震で崩壊する」というデータを実証して、原発の耐震指針の最大の欠点を明らかにした。さらに地震研は、阪神大震災現地を調べようと、震源地・野島断層の淡路島から神戸市内まで、さらに日本記録史上最大の内陸直下地震である岐阜県の「濃尾地震」震源地の根尾谷断層に至るまで、みなで徹底的に調査した。浜岡原発の相良《さがら》層の調査など、全土の原発にも足を運んで数々の調査をし、ますます原発が立地されている地層の危険性を知るに至った。



【写真は上下に6メートルの段差ができた根尾谷断層の地底においた藤田祐幸・広瀬隆】

◆東京電力本店に、原子炉内部の危険性の問題で、國學院大学教授の菅井益郎さんと広瀬隆の三人で直接交渉に訪れた時に示した藤田さんの態度は、いつもとまったく違っていた。東電に対して「嘘をつくなっ！」と叫んでテーブルを叩いたその語気の鋭さに、私は圧倒された。

◆静岡県で地震研が音頭をとって全国集会を開き、静岡県に浜ネット（浜岡原発を考える静岡

ネットワーク）が設立されることになった。

◆岡山県で、全国の高レベル放射性廃棄物「最終処分場候補地」となっている青森県・北海道・岡山県・岐阜県の人たちを招いて全国集会を開いて、高レベル廃棄物の地層処分反対の大きな声をあげた。

◆1999年2月 高レベル放射性廃棄物の最終処分場候補地となっている岐阜県瑞浪市《みずなみし》の東濃《とうのう》鉾山をみなで訪れて、ボーリングコアを点検し、一帯がいかに亀裂だらけの花崗岩層であるかを明らかにし、放射性廃棄物を埋設する計画の地下深い坑道において、いかに地下水だらけの危険地帯であるかを確認した。この時の藤田さんは、「俺は、こんな地下道にいると寒気がする。広瀬はよく平気だな」と言っていたので、心やさしい藤田さんの意外な側面を見たように感じたことを思い出す。

◆1999年9月30日 東海村JCOで臨界事故発生。テレビ局の報道センターに2日間つめて事故を解説した。夜にテレビ局から私に電話をかけてきて、「おい、急いでバスを用意して住民を避難させろ」と無理な注文をしてきた。

◆1999年と2000年 コソボ紛争終結後にバルカン半島で劣化ウラン弾の被害調査をおこなった。

◆この1999年から、「高レベル会議」と称して、毎年9月に6人で集まり、全国の温

泉地をお忍びで訪れて酒を飲み、歓談することにし、福島原発事故が起こるまで11回続いた。6人は、年齢順に、京都大学の小林圭二、藤田祐幸、広瀬隆、岡山県で高レベル最終処分場反対運動を続ける石尾禎佑と妹尾志津子、京都大学の小出裕章であった。2009年の集まりは4月に、藤田祐幸宅の見学を兼ねて、長崎県内の旅行を楽しんだ。【写真は長崎原爆資料館を訪問した時の高レベル会議】



◆2000年 原子力問題の教科書をつくるために、藤田祐幸・広瀬隆の共著で、二人で分担して『原子力発電で本当に私たちが知りたい120の基礎知識』（東京書籍）を発刊した。

◆2003年 藤田さんの長女・山田千晶《ちあき》さん一家が長崎県雪浦に家を立てて暮らしはじめた。千晶さんは東京水産大学の大学院で修士修了

後、大学院で知り合った夫が長崎県水産試験場に就職したため長崎に来たが、幼い子供を育てるために自然豊かな場所を探して、雪浦が気に入ったのである。小学校の全校生徒が40人という小さな村だが、画家、陶芸家、有機農家などの変り者が住む一種の芸術村で、1999年から毎年5月のゴールデンウィークに雪浦ウィークという奇妙な祭りを開くようになった。村民が自宅を開放して、自分の作品を展示し、訪問者がそれを楽しむこの祭典に、観光客1万人が集まるまでの人気となってきた。ここに藤田祐幸夫妻が2007年から住むようになり、得意の手製の和風をズバリと展示することが藤田さんの誇りとなったわけである。千晶さんはフルート奏者なので、友人と「スマンドス」というフォルクローレの音楽グループをつくって演奏している。

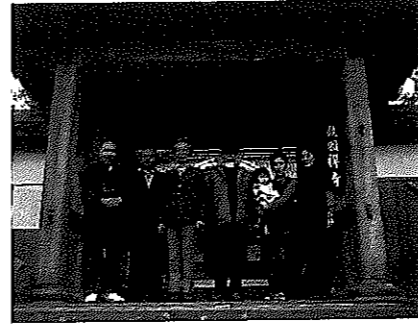
スマンドスの演奏→<https://www.youtube.com/watch?v=35nsYunvJNk>

◆2003年3月20日 米軍のイラク攻撃が開始され、大量の劣化ウラン弾が使用されたので、5月から日本電波ニュースの取材班と共に猛暑のイラク現地に入って、放射能と重金属による相乗的な影響の調査をおこなった。当時、イラクのバスラから「おい、大変だ。暑いよー」と元気な声で私に電話があったが、帰国後に、現地のイラク住民がきわめて危険な状態にあることを報告し、2003年7月1日にイラク復興支援特別措置法を審議する衆院特別委員会に参考人として招致され、現地の危険性について意見陳述をおこなった。パレスチナ解放運動の指導者であるPLOのアラファト議長が好きだった藤田さんは、アラファトと同じターバンを頭に巻き、顎鬚が立派だったので、現地のイラク人から相当に慕われたようだ。

◆2007年 慶應義塾大学助教授だったが、定年1年前に退官して、自宅のある三浦半島が静岡県浜岡原発の風下地帯であるという理由から、首都圏を逃れようと、神奈川県三浦半島から、長崎市から自動車で1時間以上かかる長崎県のひなびた西海市雪浦にある棚田跡の土地に引っ越した。ここは、すでに長女の山田千晶さん夫妻が4年前から住んでおり、三浦半島の「ポラーノ村」を再現するようなこの土地が気に入って住んだのである。熱を自然環させることによって、冬暖かく、夏涼しいパッシブ・ソーラーシステムの新居を建てて、妻の弘子さんと共に移住。この家は、エントロピー学会の仲間である建築家が設計したもので、長崎県の「木造住宅コンクール」で最優秀賞を受賞した。棚田には石垣が積み、雑草を食べる山羊を飼って、これを全自動草刈り機として利用しながら、湧水を利用して畑を耕し、鶏も飼って、養蜂をはじめた。家から下がったところにある川には白鳥が飛来する。悠々自適の日々を送りはじめたと思っただが、スーパーも八百屋もない村なので、自動車免許をとって軽トラを運転しはじめた。畑を荒らすイノシシが闊歩するので困り果て、タケノコがやたらに生えてくるので竹林にならないよう蹴散らす生活がはじまった。近在の人が野菜と魚を持ってきてくれるので、食生活は成り立っている。薪ストーブも実に心地よい生活だ。のち藤田さんは長崎市のシーボルト大学の講師もつとめ、雪浦ウィークの主役の一人となる。

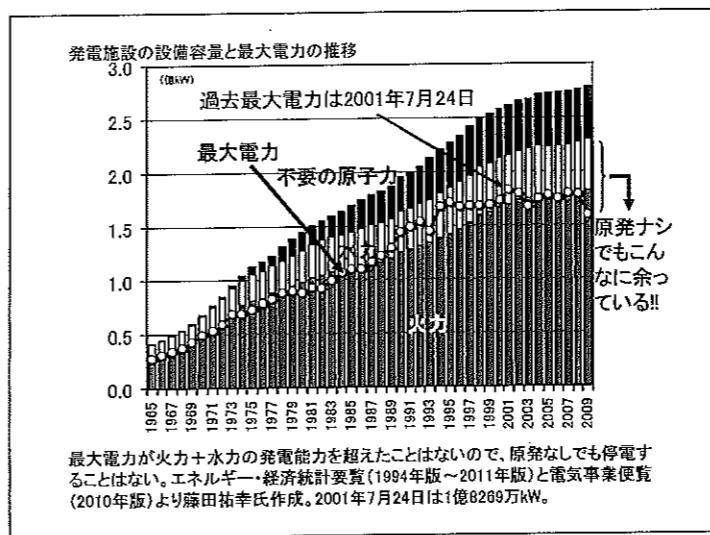
◆2009年 玄海原発が「わが国最初のプルサーマル運転」を開始するというので、風

下地帯から逃げてきたどころか、長崎県は玄海原発の風下地帯なので、プルサーマルを阻止するため、私と二人でトンデモナイ九州キャラバン連続講演会をさせられることになった。



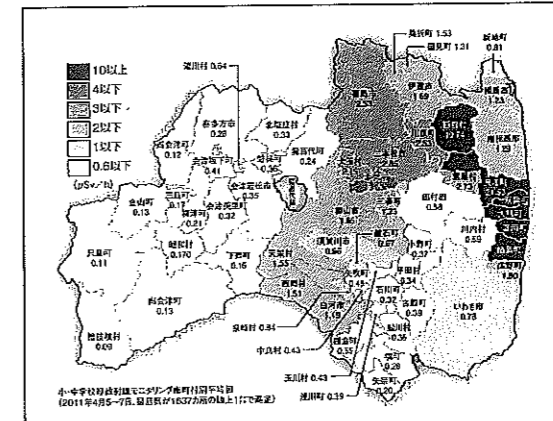
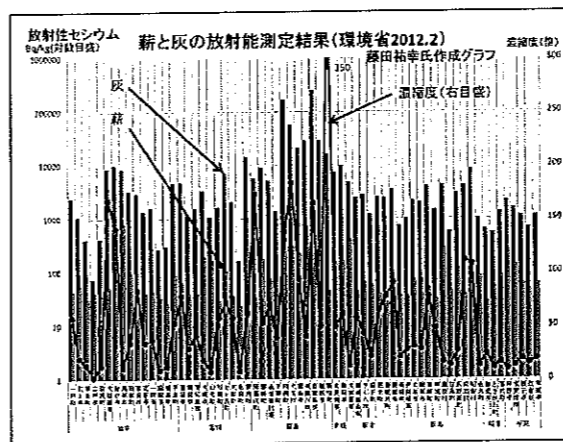
この強行軍を企画したのは深江守さんで、2月20日に宮崎を皮切りにスタートして、21日ー薩摩川内市、鹿児島市、22日ー大分県由布院、(23日休み)、24日ー北九州市、25日ー福岡市、26日ー唐津市、27日ー佐賀市、28日ー熊本県八代市、3月1日ー長崎市、そのあと藤田さんは長崎の自宅に帰り、私一人、3月2日ー3日に対馬に渡って帰宅するまで、丸2週間という長期間の講演旅行だった。【写真は九州キャラバンの途次、休息するため『まだ、まにあうのなら』（地湧社）を書いた甘蔗珠恵子さんの龍國寺でのスナップ】

◆2009年度までの発電施設の設備容量と最大電力の推移を藤田さんがまとめてグラフ化し、原発がまったく不要の電源であることを実証した。【グラフ】



◆2011年3月11日 東日本大震災が発生した。藤田さんと私は、ずっと電話で話し合い、1号機はどうなっているか、2号機は、3号機は、と事故解析を続けて、互いの意見を交換しあった。二人の結論は、原子炉がもう末期的な状態にあることを確認した。夜のテレビ局の取材に藤田さんが「福島原発ではメルトダウンが起こっている可能性が高い」ということを日本人として初めて指摘した。「これから東京に行って、テレビで解説をつとめる予定だ」と言っ

ていたが、その直後、「おい、テレビ局で俺の坐るところに、推進派の学者が坐ったよ」という連絡が入った。そして藤田さんは、マスコミから完全にシャットアウトされてしまった。しかし2012年には、薪を燃やした灰が高濃度に放射能汚染されている現状【グラフ】を調べて汚染ガレキの拡散に猛烈に反対し、福島県内の学校の汚染度MAP【地図】を作成するなどして、東日本に警告を発し続けた。藤田さんが最も得意としたのは、自ら誇っていたように「美しいグラフ・図版」の作成能力であった。



◆2011年 これまで長く調査・分析してきた藤田さんのライフワーク「日本の原子力開発は、電力のためではない。原爆の製造のためにスタートした」ということを、歴史的な人脈を追及して明らかにした書籍『藤田祐幸が検証する原発と原爆の間』（本の泉社）



がら、鹿児島県出水市での講演会に行きました。今度は、川内原発を止めるために、もう一度、運転差止め仮処分を求めようと呼びかけました。水俣病の患者さんたちも参加してください、みなで打ち合わせをしました。薩摩川内市から鳥原良子さんが、鹿児島市から小川美沙子さんが、宮崎県から青木幸雄さんが来てくださいましたが、みな「藤田さんのお体が心配だ」とおっしゃっていました。

予定通り、翌7月18日に小坂さんと、藤田さんが入院している久留米の病院をめざして自動車で走りました。再び益城町の被災地を見ながら……久留米に入ってから、一応連絡しておこうと藤田さんに電話をかけました。すると、藤田さんのお嬢さん（長女の山田千晶さん）が電話に出て、「お父さん、広瀬さんよ、電話に出る？」と言うと、いきなり藤田さんの叫ぶような声が聞こえました。何をおっしゃっているのか、よく聞き取れませんでした。お嬢さんによると、もう昏睡状態が続いて、久留米ではなく「自宅で死にたい」と言って、長崎のご自宅のある雪浦にお帰りになっていたのです。私は茫然として、お見舞いもできずに東京に帰宅しましたが、お嬢さんから次のようなメールが届いていました。

「最後は雪浦でおわりたということ、先週の水曜日に自宅から車で15分のところにある、カリタス診療所というところに移りました。肺の状態が悪く、昏睡状態が続いています。土曜日（16日）に、まだ意識があるときに、広瀬さんと話したいということで、携帯に電話をしましたが、話せませんでした。先ほど、広瀬さんの声を聞いて、私もびっくりする程大きな声を出しました。最後に広瀬さんの声を聞いて、嬉しかったのだと思います。今日までの命かと思えます。いろいろありがとうございました。万が一のときは、広瀬さんに連絡すればいいと、聞いています」とあったのです。

けれど、夜にお嬢さんから「さきほど、父が亡くなりました」と信じられないお電話がありました。涙が止まらなくなりました。無二の親友が、どうしてこんなに早く……ごめんなさい。ごめんなさい。

◆2016年7月18日の夜、藤田祐幸さんが亡くなりました。藤田さんと親しくされていたみなさまも、この突然の訃報に、限りない悲しみを覚えられていらっしゃると思います。

でも私にとっては、藤田祐幸さんは、生き続けています。死ぬものですか。

この20年以上、ずっと行動を共にしてきたのです。やり遂げなければならないことがあるのです。みなさんと共に……

◆藤田さんが遺した書庫には、文学書から哲学書、美術関係から、もちろん原発関係の書籍や資料がぎっしり……。すべて、藤田さんの想いの詰まったものであり、また藤田さんを支えてきたものです。

千晶さんは、こう提案しています。

「これを、ここに置いておくのもどうしたものかな……。もし活用してくださる方があるのなら、父も喜ぶだろうし、私達家族も嬉しいことです。また、私達も、改めて、父の書籍を読み返してみたい衝動にもかられました。そこで、母や妹とも相談しまして、父の自宅の庭に、書籍の庵を建てようかと考えはじめています。5メートル×20メートル位の畑をしていた土地に、書籍庫とくつろげる空間を、と。

美しい雪浦の景色を一望できる場所で、趣味のタンノイや、クラシックの数々のレコードも楽しめる空間です。父は、この雪浦で、理想・思想と生活をついにし、地人として生きたいと望んでいました。そこで、この建物を「地人舎」と名付けようかと考えてます。「地人舎」は、全ての訪れてくださる方に公開し、ゆっくり過ごしていただきたいと思えます。いずれ書籍や資料のリストをつくり、ここを訪れなくても、貸し出しができるような形にできないものかとも、考えています。また、人が集い、雪浦の地域の魅力を発信できる場所の一つにしていけたらとも考えています。資金は、多くはないが、父が母に残してくれたものがあり、それを使うこととしたいと考えています。まだ想いだけで、どのような形にしたらいいのか、書籍や資料もどのような形で整理や公開したらいいのか、わかりません。お知恵と力を貸していただけませんか。今後とも、よろしく願います。」みなさんもお知恵を貸してください。

故藤田祐幸先生へ

先生、息子、伸之の嶋橋原発労災では大変お世話になりました。労災認定からもう22年になります。

先生に最後にお会いいたしましたのは一昨年秋、9月2日の京都東本願寺さんでの先生の講演会でした。その時はすでに胃の全摘手術を終えた後で少々お疲れのご様子でした。夕方からのご講演でした。大きなお声でいつもと少しも変わらない、お元気いっぱいのお声。難しいお話ですが、いつの間にか大笑いをするようなお話に入っていきます。

「私は原発の被害を避けるつもりで九州の方へ逃げていったのですが方向を間違えてしまいました。」

玄海原発や川内原発あるいは中国や韓国の原発のことを言ったのでしょうか。今年になりまして熊本で地震が起きてしまいました。川内原発が心配です。

息子が生きておりました頃は浜岡に住んでおりましたが、浜岡に娘たち家族を呼び寄せるのは危険と考えまして生まれ故郷の横須賀に戻りました。平成8年の夏の頃でした。藤田先生の、浜岡はいつか危ないから横須賀に帰った方が良く、との言葉で決断しました。藤田先生も九州の方へ避難されたのだと思いました。原子力資料情報室の沢井さんと、先生も怖くて九州の方へ逃げたのよね、と話しておりました。当時、先生は私の家の近くの三浦半島に住んでおられたのです。後でわかったのですが九州には娘さんが住んでいらしたからだったのですね。

2007年1月21日横浜中華街、華正楼本店での一足早い藤田先生退官記念パーティーの時、定年を機に娘さんたちのおられる場所に、「理想の家を建てて、これからは農業半分、読書半分、晴耕雨読でのんびりと暮らしていこう」と言われました。きっとあの時が一番楽しく、理想を現実にしたよき時代、だったのだと思います。

私も主人の定年を機に息子のいる浜岡へ移った頃は、「老後は静岡でのんびりと息子と暮らしていこう」と思っていたのです。まさか息子が白血病で倒れるとは思いませんでした。

嶋橋原発労災の呼びかけ人の藤田先生、労災申請をお願いした海渡弁護士、労災認定支援の活動を支えてくれた沢井さんやたんぼぼ舎の皆さん、私の活動を「浜岡からの手紙」の題名でミニコミ紙を発行し伝えてくれた藤田祐司さん、そのほか大勢の支援者の皆さんとお知り合いになりました。

藤田先生にお会いしてから考えが変わりました。横須賀で生まれ、それまで一歩もその場を離れず家でご飯を作り、洗濯をし、パートで働いていた一介の主婦が、息子の無念を晴らすために反原発の活動に動き出したのです。労災認定の訴えで北海道から九州まで、藤田先生に講演に連れて行っていただきました。早期労災認定を求める署名も全国から30万筆もいただきました。

80歳になりますとだんだん足腰が思うように動かなくなってしまう。一昨年、先生にお会いしました頃から杖をつくようになりました。原発反対の行動は思うようにできませんが藤田先生のおっしゃる通り、各々がその場の原発に反対することが大切だと思います。原発の再稼働に反対していきましょう。40年も経った原発は危険です。形あるものいつか壊れるものです。この言葉を声を大にして死ぬまで言い続けます。

藤田先生、安らかにお休みください。

嶋橋美智子